

2025 年 11 月 4 日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	菊地 宏	所属	建築学科
		職位	教授

研究課題	チロル地方の地形風土と山岳都市の調査、視察
研究先機関	オーストリア チェコ
主な滞在地 (国・都市名)	オーストリア・ウィーン チェコ・プラハ
渡航日程	2025 年 10 月 21 日 ～ 25 年 10 月 31 日 ( 11 日間)
研究目的・理由	チロル地方の山岳地方を訪れ、その山岳文化、山岳都市の調査、視察を行う。隣国のスイスとの山岳文化の違いなどを調査をする。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、 論文発表等)	地形風土と山岳地域の都市と建築について将来的に著書を予定している。

## 研究内容

山岳都市研究は、継続研究であるが、オーストリアは初めての視察となる。オーストリアは東西に長く移動距離も長い。また山岳地域はすでに気温が低くオフシーズンに入っており、効率よく回ることが難しいことから、山岳地域の玄関口であるザルツブルク、またオーストリアの首都であるウィーンを中心に調査の基盤固めをする形となった。後半はチェコのプラハへ移動し、近隣諸国との差異などを確認しつつ、東欧文化圏への足掛かりとしての訪問という位置づけで視察してくることとなった。

ウィーンは、ドナウ川流域の都市であるにも関わらず、直接ドナウ川を囲い込むような作りではなく、横に据える形で発展してきている。ドナウ川の川幅は広く、ヴルタヴァ川を中心に据えるプラハとは大きく異なる構造をもつ。またウィーンは都市計画として同心円状に発展をしている都市で、都市の規模も大きい。都市周辺は小高い丘陵地が広がり、大らかな都市像を形成している。土地柄もあり、山岳文化は特に自然史博物館の鉱物展示で見られるように非常に強い興味と関心が伺える。建築においては、石の扱いは、様式や時代によって様々ではあるが、建築家アドルフ・ロースは石材を外装のみならず内装でも意識的に採用しているし、建築家ミース・ファン・デル・ローエのトゥーゲンハット邸にもかなり石が強い表現として登場する。どちらの建築家も石彫や石工の父を持ち、強く素材としての石へ執着が表現として見られる。また今回旅をする中で建築の対称性、非対称性という表現の問題と対称性がほぼない山岳地形、鉱物レベルでは対称性をもつ自然観など、様々なスケールでの振る舞いについて漠然ながら見る主軸に据え、物を横断的に観察していった。

ウィーンでは、オットーワグナーの郵便貯金をはじめ様々な建築を視察した。また丘陵地に立つアドルフ・ロースの多数のヴィラなどを見ながら高台を目指したが、終着点として、小高い丘から都市を一望できる視点場をいくつか確認することができた。これは、山岳文化と都市を接続する上で大事な構造でその足元の山小屋などに立ち寄ることがそれを確かめることができた。また戦時中に作られたウィーン市内に点在する高射砲跡も訪れたが、その上から望める場所がありそこからよくウィーンの都市地形を観察することができた。

ザルツブルクは、日帰りの強行スケジュールとなったが、山岳映画の舞台として様々な場所が登場するし、実際訪れると、かなり近くに山が迫っていることが見て取れた。また気候変動が平野部ではなく強く山岳気候に支配されており、天候も不安定で、Salzburg Hochthron へも行って見たが、そこから見る景色は、平野部と山岳部を二分しており、かなり特異な場所であることが確認できた。ザルツブルクのザルツは塩の意味であり、塩の採掘として発展してきた背景、建築のみならず芸術分野でも意識の高い場所であることが感じ取られた。旧市街では、ドームプラッツへ通ずる一連のシークエンス変化は、スケール感が秀逸で非常に優れたものであった。

チェコでは、ミースの建物のあるブルノをはじめ首都プラハを訪れたが、どちらもお城を高台に据えた都市構造を持つ一方、ブルノはプラハのような川を中心に据えるほどの川は表面的には見えず、高低差はあれど、その都市構造は異なることが見てとれた。

都市の風景をカメラに収めていると確実に広角寄りの写真が向いている都市と望遠寄りの写真が向く都市があることに気づく。特に地形が大きく迫った入る場所では、建物の建ち方の変化、道の形が地形に強く依存しており、それがレンズの選択と強く関係していることが改めて感じられた。

大学授業における  
研究成果の還元

地形、地質といった切り口で長きに渡って建築との関係を探ってきているが、その中で、実際世界のそれぞれの都市ではどういう特徴を持つのか、それを比較していくことによってそれぞれの都市のもつ固有性、また時代を超えて地形の支配下にある都市が作り出す文化とはまた別の視点での都市像。そういったことを旅の記録を通じて学生へ伝えていけると信じている。また、一見全く別の地域で、突如共通したふるまいが現れたり、似たような経験が起こることに人の営みとしての都市の共通性を見出すこともできた。また山岳部に深ければ深いほど、山並みへの依存度が増すと同時に川と都市の関係も揺るがないものとなっていく傾向にあるが、山岳地域から少し距離を置くと、これまで無視されていた微地形が山岳に変わって都市景観の主役へと踊り出て、それが都市に豊かな景観をもたらしていることも事実で、ただ、それを都市のみに絞って説明することは難しく、まず初めに山岳地形があって、そこで目を養ったあと都市部をみると、地形の起伏と都市の姿が手にとるようにわかると考えている。建築のデザインも多かれ少なかれ、地形に依存しているし、素材表現もその土地でとれる材料に依存する。今回は二人の建築家、ミース・ファン・デル・ローエとアドルフ・ロースを通じて石の扱いを見ることもできたし、そこには深いレベルで山岳文化との接続が世代を超えて行われていることを実感できた。目先のデザインではなく、もっと大きな視点でのデザインの源泉を教育という形で還元していきたい。

研究日程（全滞在期間）

出発日 (現地時間)	出発地 (国・都市名)	到着日 (現地時間)	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
2025/10/21 (9:30)	日本・羽田	(20:30)	オーストリア・ウィーン	(移動日)	1
2025/10/22 (6:39)	オーストリア・ウィーン	(8:09)	チェコ・ブルノ	(日帰り)トゥーゲンハット邸見学	1
2025/10/23 (6:24)	オーストリア・ウィーン	(8:53)	オーストリア・ザルツブルク	市内視察・山岳訪問	1
2025/10/24			ウィーン	(日帰り)セセッション、マジョリカハウス、自然史博物館、郵便貯金局	1
2025/10/25			ウィーン	フンデルトヴァッサーハウス・クンストハウス・高射砲塔・カールマルクスホーフ	1
2025/10/26			ウィーン	高射砲塔・ロース建築群・工作連盟住宅	1
2025/10/27 (17:10)	オーストリア・ウィーン	(21:15)	チェコ・プラハ	アルベルティーナ近代美術館 (午後移動日)	1
2025/10/28			プラハ	市内視察、プラハ城	1
2025/10/29			プラハ	ウィンターニッツ邸見学	1
2025/10/30 (11:30)	チェコ・プラハ	10/31 (10:45)	日本・羽田		
備考					

以上

※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。



ブルノ\_トゥーゲンハット邸



ザルツブルグ\_旧市街地



ザルツブルグ山岳地域



ウィーン\_セセッション



ウィーン郵便貯金局



ウィーン自然歴史博物館



ウィーン郊外



プラハ市街地



プラハ\_ウィンターニッツ邸